12月6日　「待降・キリストの系図」　　聖書研究

テキスト　　マタイによる福音書　1章1〜17節

〈イエス・キリストの系図〉

ユダヤ人は系図を重んじた。とくに祭司や王を任職する際には系図が重要であった。系図は、一代一代を丁寧にたどっていくことでなく、何よりも系統を明確にするために用いられた。すると、「マタイによる福音書」は、系図から始まっており、日本人読者としては取っつきにくさをおぼえるが、もともとユダヤ人対象に書かれたものならば、イエス・キリストの系図から始めるのは当然であろう。

ところで、1節には、イエスが、どういう御方なのか、つまり、どのような系統なのかが、はっきりと示されている。それは、「アブラハムの子ダビデの子」という系統である。これは、アブラハムの子孫、ダビデの子孫ということにほかならない。

「イエス・キリスト」は、イエスのフルネームでなく、キリスト（＝メシア）であるイエスということだが、キリスト＝メシアは、油注がれた者という意味である。ユダヤ人にとって、キリスト＝メシア、油注がれた者と言えば、預言者、祭司、王であったが、とくにこの系図では、神がユダヤ人の先祖アブラハムへと約束なさった全世界のメシアが、さらにはユダヤ人の王ダビデへと約束なさった王の働きをするメシアが、イエスであることが証言されている。

したがって、イエス・キリストの系図は、ユダヤ人にとってたいへん重要であるだけでなく、旧約聖書と新約聖書を連結させるという、たいへん重要な役割を担っている。

〈神の約束が実現した系列・アブラハムの子ダビデの子〉

神は、アブラハムに対して、全世界の諸国民がその子孫によって祝福を得るとの約束をなさった(創22:18)。この時、やがて時が満ちるならば、アブラハムの子孫から、全世界の諸国民にとってのメシアの到来が予告された。神は、そのメシアを送られるために、アブラハムの子イシュマエルでなくイサクを、イサクの子エサウでなくヤコブを、そして、ヤコブの12人の息子の内ユダへと続く系統を選ばれた。神は、ユダに対して、王権を約束された（創49:10)。このユダの子孫がダビデとなるが、彼はユダヤ人の王となり、神は、このダビデ王に対して、子孫から永遠の王・メシアが出ることを約束なさった（サムエル下7:12〜16)。

アブラハムからダビデまでがおよそ14代、ダビデからバビロン移住までがおよそ14代、そして、バビロン移住からイエスまでがおよそ14代(17)、時間的にはおよそ2000年の年月を経て、神の約束がついにイエスにおいて実現した。

〈神の約束が実現した系列の特徴〉

イエス・キリストの系図で、とくに注目に値するのは、ユダヤ人としての純潔性を示すべきなのに、タマル（3)、ラハブ（5)、ルツ（5）といった異邦人の女性が関わっていることが明記されているところ、そして、ダビデ王が人妻バト・シェバを奪った罪を犯したことが分かるように、わざわざ、「ウリヤの妻」(6）と明記されているところである。神の約束が、異邦人が深く関わり、さらに罪と切っても切れは離せない系列で実現したことは、何よりも、イエスが、ユダヤ人だけでなく、全世界の諸国民が信じて従うべき王的なメシア、とくに罪からの救い主としてお生まれになったことが示されている。　　（長谷川潤）

12月6日　「待降・キリストの系図」　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書　1章1〜17節

〔単元のねらい〕

待降節の第二主日に与えられたテキストは、マタイによる福音書の主イエスの系図である。契約の子はともかく、地域の子らには、まったく知らない人の名前が羅列され、興味も持てないものであるかもしれない。しかし、人となられたイエスさまのご降誕のおかげで、ダビデの子孫でも、アブラハムの子孫でもない、まったくの異邦人である私どもが、神の子とされたことの幸いを告げたい。降誕のご目的が、私どもの救いのためであることを鮮やかに告げたい。

「イエスさまのおかげで、アブラハムの子」

今朝の礼拝のために、聖書は、マタイによる福音書を読みました。その最初のページを読みました。自分の聖書を開いて、一緒に読んだお友だちは、ズラーっと知らない人の名前がならんでいて、ちっともおもしろくなかったでしょう？　聴いていたお友だちは、もっとおもしろくなかったかもしれません。それは、知らない人の名前ばかりだからだと思います。知っている人の名前が出てきたら、まだよい、興味がわくかもしれません。

ここに挙げられたほとんどの人は男の人です。2節には、「アブラハムはイサクをもうけ」とあります。「もうける」というのは、むつかしいことばですね。「アブラハムの子どもは、イサクです」「アブラハムは、イサクのお父さんです」「アブラハムには、イサクが生まれました」という意味です。そのように、自分のお父さんは誰で、そのまたお父さん、おじいちゃんは誰で、ひいおじいちゃんは誰で、ひいひいおじいちゃんは誰誰で、というようにさかのぼって調べて、文章や図に書いたものを「系図」と言います。皆さんの中で、自分の系図を見たことのある人はいますか。先生の家には、ありません。お父さんのお父さん、おじいちゃんのことは知っていますが、曾おじいちゃんのことは、聞いたことがありません。つまり、先生は、立派な、由緒ある「生まれ」ではないということです。

皆さんの中で、お父さんが誰もが知っていても有名な人だったり、おじいちゃんが有名な人だったり、あるいは先祖の中に、そんなとても有名で偉い人は、いますか？　もしいたら、自慢したくなるかもしれませんね。親戚にいたとしてもそうでしょう。友だちの友だちのそのお友だちのお父さんが有名な人であっても、自慢したり、その人のこと知ってるよ、会ったことあるよと言うと、ちょっとカッコ良い気持ちがするかもしれません。

先生には、そんな人はだれ一人もいません。いえ……、これは、間違いです。嘘になってしまいます。実は、先生には、世界で一番有名な人、世界で一番偉い人、その人を先生の先祖に持っているのです。それなら、その人はいったい誰でしょうか。すぐにピンと来たお友だちもいるでしょう。世界で一番有名な人は、イエスさまです。世界の中で比べることもできない偉い人もイエスさまです。そうです。このイエスさまを、先生は、先生の先祖に持っているのです。

「エー、イエスさまは、日本人ではないのに、どうして？　イエスさまはユダヤ人のはずだと思うけど、何故？」と思うでしょう。その気持ちはよく分かります。でも、実は、これは、先生だけのことではありません。イエスさまが、この地上にお生まれになられた目的は、先生だけではなく、僕たち私たちをイエスさまの家族にするためなのです。イエスさまの弟、妹にするためなのです。

マタイによる福音書の最初に、書いてある言葉をもう一度、読みましょう。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」。アブラハムというのは、信仰の父と言われる神さまの民のイスラエルの人々にとって、一番有名な人、大切な人です。なぜなら、神さまは、アブラハムを選んで、ご自分との契約を与えてくださったからです。それは、神さまの御言葉を信じて従うなら、アブラハムを祝福し、大いなる国民とし、アブラハム本人を祝福の源とするというお約束です。アブラハムの子孫にも救いをもたらすという恵みのお約束、すばらしい、祝福のご契約です。神さまからの一方的な契約です。ですから、アブラハムの子孫であるということは、神さまの子どもであるということを意味したのです。

次にダビデという人も大切です。この人は、イスラエルの歴史の中で一番、活躍した有名な王様です。エルサレムに最初に神殿を建てたのは、この王さまでした。そして何よりも、スバラシイことは、神さまは、このダビデ王さまの子孫から、救い主がお生まれになられると約束されたことです。ですから、聖書の歴史の中で、神さまの民の歴史で、ダビデ王さまは重要な人です。

マタイによる福音書を書いたマタイさんは、その最初に、大切なことを、ずばり書きました。イエスさまとはどなたなのかをご紹介をしたのです。つまり、イエスさまは、あのアブラハムさんの子孫です。あのダビデさんの子孫です。つまり、神さまが約束してくださった救い主、キリストであられるのです。それが、「イエス・キリスト」というお名前の意味です。

そして、その次に、大急ぎで、それなら、イエスさまがどのようにアブラハムにまでつながって行くのかを、記します。ダァーと、名前が続きますね。ところが、その名前の中には、実は、ユダヤ人からすると、良い方で有名であるよりは、悪い方で、悪いことで有名な人の名前も出てくるのでびっくりしてしまいます。とにかく、いろいろな人たちが出てきます。今朝は、それに触れる時間はありません。でも大切なことを一つだけ、お話します。

皆さんは、アブラハムの子孫ですか？ 違うでしょう。そうすると、神さまの祝福にあずかれませんか？ 神さまの祝福された人たち、神さまの民に入れませんか？ 問題はそこです。ユダヤ人のイエスさまは、僕たち私たちとは関係のないお方になってしまいます。

しかし、そうではありません。なぜなら、イエスさまを信じる人は、イエスさまを一つに結ばれるからです。イエスさまによって、イエスさまの兄弟となるのです。神さまの子どもです。アブラハムの子孫、ダビデの子孫のイエスさまは、ここにいる僕たち私たちのことを、イエスさまにつながる人としてくださるのです。そうなると、アブラハムもダビデも僕たち私たちの先祖です。僕たち私たちは、神さまの民の一員になれるのです。イエスさまのおかげで、です。

イエスさまは、天の神さまの独り子です。天のお父さまの御子です。つまり、神さま御自身です。しかし、僕たち私たちを救うために、僕たち私たちを神さまの子どもにするために、神さまの民の一人に加えてくださるために、この地上に人間となってお生まれくださったのです。

天のお父さまは、今朝も、イエスさまによって、僕たち私たちを神さまの約束された救い祝福のつながりの中においてくださいます。僕たち私たちは、正真正銘、アブラハムの子孫、神さまの子どもなのです。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 19章9節

イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

12月6日　「待降・キリストの系図」　　幼稚科

〈ねらい〉

神様の独り子であるイエス様が、アブラハムの子孫、ダビデの子孫として、人となってお生れくださったことを知り、そのイエス様を信じるわたしたちも、イエス様によって神様の子どもとされていることを喜び、感謝する。

〈展開例〉

絵を使って（125ページ参照）、お話しする。

①イエス様がお生まれになるずっとずっと昔、2000年前くらいのこと、神様はアブラハムさんに大切なお約束をされました。神様は、アブラハムさんが心から神様を信じ、神様の言葉をよく聞き、言われたとおりに行うことを喜ばれて言われました。「わたしは、必ずあなたを豊かに祝福し、大きな喜びをあたえよう。あなたの子どもたちを、天の星のように、海辺の砂のように増やそう。どの国の人もみんな、あなたの子孫によって、大きな喜びがあたえられます。あなたが、わたしの言葉をよく聞き、言われたとおりに行ったからです」。そして、本当に神様の約束通り、アブラハムさんの子どもたちから、また子どもが生まれ、またその子どもたちから子どもが生まれ、天の星のように増えて行きました。

②そして、その中にダビデさんが生まれました。

③ダビデさんは神様によって王さまとされ、ダビデ王様も神様から約束をいただきました。「ダビデよ。あなたの子どもの子どもの子どもの子ども……子孫の中から、真の王さま、救い主が生まれる」。

④そして、本当に神様の約束通り、ダビデさんの子どもの子ども、そのまた子どもたちの中に、イエスさまのお父さんとなるヨセフさんが生まれ、イエスさまがお生れになったのです。（10月25日④の絵を使う）

神様のひとり子イエスさまが、アブラハムの子ダビデの子として、人となってお生れくださいました。イエスさまを信じるわたしたちが、神様の子どもとされるためです。神様は、ずっとずっと前から、この約束をしていてくださり、本当にそのとおりにしてくださったのです。わたしたちを罪から救うためです。神様ありがとう。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。イエスさまによって、わたしも神様の子どもにしてくださって、ありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　小学科下級

〈ねらい〉

実際に聖書を開いて、イエス・キリストに至る二千年の契約の歴史を確認する。

〈展開例〉

今日は、聖書早開き選手権を開催します。イエス様の系図に名前が載っている人たちが、聖書に登場する箇所を開いてみよう。

アブラハム　創世記12：1－8（p15）
イサク　　創世記21：1－8（p29）
ヤコブ　　創世記25：19－26（p39）
ユダ　　創世記29：35（p48）

女性の名前も載っていましたね。（できれば、それぞれの物語を解説して）

タマル　　創世記38：1－30（p67）
ラハブ　　ヨシュア記2：1－24（p341）
ボアズとルツ　　ルツ記1・2章（p421）

系図だけしか出てこない人もいますよ。
アラム、アミナダブ、ナフション、サルモン、
オベド　　ルツ記4：18－22（p427）

それから、ついに王国時代に入ります。
エッサイ　　サムエル記上16章（p453）
ダビデ　　サムエル記上16章（p453）
ウリヤの妻　サムエル記下11章（p495）
ソロモン　　サムエル記下12：24（p498）

その後の王様たちは列王記などで確認してくださいね。名前が載っている王様も、載っていない王様もいるよ。系図は、歴代誌上3：10－16(p629)にあります。

そしてバビロン捕囚の後の人たちで、聖書に名前が出てくるのは、この二人です。

シャルティエル　歴代誌上3：17（p630）
ゼルバベル　　エズラ記3：1－7（p726）

それからイエス様がお生まれになるまで、およそ400年ほどの間にも、色んな人がいました。ヨセフさん以外は聖書には登場しませんが、そんな一人ひとりの生涯も、イエス様がお生まれになるために必要だったのですね。

〈祈り〉

神様。イエス様がお生まれになるずっとずっと前から、そしてイエス様がお生まれになった後もずっとずっと、私たちを導いていてくださってありがとうございます。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　小学科上級

〈ねらい〉

救い主イエス・キリストの系図の意味を学ぶ。

〈展開例〉

新約聖書の最初のページにはカタカナの人の名前がたくさん出てきます。マタイによる福音書1章のことです。どうやらこのことは聖書を初めて読む人の多くが驚きを感じることのようです。学校や会社で「新約聖書」が無料で配られたのを手に取ったという方もおられるでしょう。「国際ギデオン協会」というグループが日本にもあり、聖書の無料贈呈というたいへん立派な活動を行っています。しかしです。初めて手にした「新約聖書」をわくわくしながら最初のページを開いてみたら、カタカナだらけだった。最後のページを開いてみたら、これまたとても難しい『ヨハネの黙示録』だった。これですっかり嫌気がさし、「聖書というのは最初から最後までワケが分からない本でした」と結論づけて本棚の奥に押し込んでしまったという人がたくさんいるらしいのです。

しかしもちろんそれは残念なことです。聖書という書物は、本当は面白い本なのです。また、最初と最後しか読まないという聖書の読み方も間違っていますが、そのことよりもっと残念に思うことは、新約聖書の最初のカタカナだらけのページには面白いことが書かれているということを知らずにいる方が多くおられることです。

イエスさまの系図の中で特に注目すべきは、この中に含まれている女性たちの名前であると言われています。それはタマル（3節）、ラハブ（5節）、ルツ（5節）、そしてウリヤの妻（6節）です。「ウリヤの妻」の名前はバト・シェバです（サムエル記上11：3など）。

この四人の女性は、旧約聖書の中では有名な人たちです。しかも、彼女たちが有名な理由は、多くの人に褒められるような立派な働きをしたからというようなことではありません。むしろどちらかといえばその逆です、何となく話題にしにくいような、複雑で難しい人間関係の中で悩んだり苦しんだり、またそのあたりのことで罪を犯したりした人々として、有名なのです。

彼女たちが実際にどのような事情の中にいたかを知りたい方は、それぞれの個所を読んでみてください。タマルについては創世記38章に、ラハブについてはヨシュア記2章に、ルツについてはルツ記に、そしてバト・シェバについてはサムエル記下11章に書かれています。

四人に共通していることがあります。ちょっぴり踏み込んだ言い方を許していただきたいのですが、要するに、「男の人との関係」という点に問題を抱えていた人々だったのです。

「面白い」のはそのような人々がイエスさまの系図の中に堂々と出てくることです。なんとなく都合が悪い感じの人々の名前はイエスさまの系図の中から除いてしまいましょう、というふうにこの福音書を書いたマタイは考えませんでした。考え方はむしろ逆でした。その人々を積極的に登場させました。イエスさまにとってそのような話は、恥ずかしがって隠したりするようなことではありませんということをきちんと説明しなければならないからです。

もちろんわたしたちは、罪を犯してもよいという言い方はできません。でも、わたしたちの目の前に複雑な人間関係の中で悩んでいる人々がいるときに、その人の悩みに耳を傾けることや同情することは、許されることですし、大切なことです。イエスさまは、人生の難しい問題を抱えている人々を「救う」ために、そのような系図の中にお生まれになったのです。

〈お祈り〉

神さま、今日はイエスさまの系図の意味を学びました。もしわたしたちの近くに複雑な人間関係で苦しんでいる友達がいたら、助けてあげることができますように。またわたしたちがそのようなことで苦しんでいるときには、神さま、あなたがわたしたちを助けてくださいますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　中学科

〈ねらい〉

〇イエスの系図の特徴を理解する。

〇イエスの系図に示された神の救いの意味を学ぶ。

〈展開例〉

質問１　1節には、イエス・キリストは誰の子であると書かれているか。

質問２　3節と5節には、それぞれ誰によって子どもをもうけたと書いてあるか。

質問３　6節には、誰の妻によって子どもをもうけたと書いてあるか。

質問４　17節には、アブラハムからキリストに至るまで何代を経過したと書いてあるか。

質問５　福音書の初めにこのような系図が書かれている理由は何だと思うか。

まとめ

イエス・キリストは、マタイによる福音書によれば、アブラハムの子でありダビデの子であると初めに説明がある。誰々が誰々をもうけ……という記述が続くが、これは、誰を子供として持ったという意味になり、そのほとんどが、男性の名前になっている。つまり、父から息子へと続く男系の家系図なのである。3節、5節に来ると、この男系の名前の中にタマル、ラハブ、ルツという女性の名前が出てくる。さらに6節に来ると、ウリヤの妻によってダビデがソロモンをもうけたという記述が出てくる。そして、最後の17節には、アブラハムからキリストに至るまでは、計42代に亘るということが記されている。

よく新約聖書の初めのこのマタイ福音書の長い系図を読んで、聖書を読むのに挫折したという話を聞くが、一見無駄に長く思えるこの系図には神の救いの御計画の深い意味が隠されている。まず、系図は、キリストがアブラハムとダビデの子孫であるという記述から始まるが、アブラハムとはイスラエルの父祖であるが、その人物の子ということで、イエスは、旧約の神の民イスラエルを通して地上のすべての国民に救いが及ぶというあの約束の実現者であるということが示され、イスラエル統一王国の偉大な王ダビデの子であることが示されることで、イエスは、神がダビデに永遠の王座を与えられると約束されたあの子孫であるということが示されている。その間に何人かの女性の名前が出てくるが、彼女たちは、特別有名だったり、身分が高かったりするわけではなく、逆に選民イスラエルの系図には、到底ふさわしくないと考えられるような問題ありの人々である。タマルは、ユダの妻ではなく、嫁であった。ラハブは売春婦、ルツは外国人、ウリヤの妻と記されたバト・シェバは人妻であって、不倫の末に人殺しをしてダビデは彼女をその夫ウリヤから取り上げ、その彼女からソロモンが生まれるということになったのである。救い主イエス・キリストの系図は、このように、完璧で非の打ちどころのないものなどではなく、人間の罪と弱さが露出した系図であった。イエスは、そうした罪と弱さで自分たちではどうにもならなくなっている私たちを救うために地上に来てくださったのである。

〈祈り〉

神様、弱くどうしようもない私たちのためにイエス様を送ってくださり、ありがとうございます。私たちは、自分自身の力ではどうにもならないような汚れた弱い者たちですが、イエス様を信じる時、救いに与ることができますから、心から感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。